

令和6年度病害虫発生予察指導情報
対象病害虫：トマトキバガ（ナス科野菜）

令和6年6月18日
鳥取県病害虫防除所

1 対象病害虫

トマトキバガ（令和6年6月11日病害虫特殊報発生予察第1号を発表）

2 発生状況

- （1） 6月17日に県中部琴浦町のミニトマトハウスの病害虫発生調査においてトマトキバガ幼虫による茎葉と果実の被害（図1，2）が初確認されました。
- （2） 他地区においても被害が発生していることが懸念されるため、ほ場内を見回り、被害の早期発見と発生初期の防除を徹底してください。

3 本種の特徴及び生態

- （1） 成虫は翅を閉じた状態で体長約5mm（開張約10mm）で、前翅は灰褐色地に黒色斑が散在し、後翅は一様に淡黒褐色である（図3）。
幼虫の体長は、終齢幼虫で約8mm、体色は淡緑色～淡赤白色。前胸の背面後方に細い黒色横帯がある（図4）。
- （2） 主な寄主植物はトマト、ナス、ピーマン、バレイショなどのナス科植物で、マメ科のインゲンマメも寄主植物として確認されている。
- （3） 1年に複数の世代が発生し、繁殖力が高い。卵～成虫になるまでの期間は24～38日程度で、気温が低いと生育期間はさらに伸びる。成虫は夜行性で、日中は葉の間に隠れていることが多く、雌は一生のうちに平均で約260個の卵を寄主植物の裏面などに産み付ける。
- （4） トマトでは、幼虫が茎葉の内部に潜孔し、食害部分は表面だけが残る白～褐変した外観となる（図1）。また、果実へも幼虫が食入し、穿孔痕が生じるとともに食害部分の腐敗が生じ果実品質が著しく低下する（図2）。

4 防除対策

- （1） ほ場内をよく見回り、早期発見に努める。本虫と疑われる幼虫を発見した場合には、速やかに鳥取県病害虫防除所に連絡する。
- （2） 発生を確認した場合は、表を参考にして登録のある殺虫剤により防除を行う。薬剤散布にあたっては、最新の農薬登録情報を確認し、薬剤抵抗性

の発達を防ぐため、系統が異なる薬剤のローテーション散布を行う。

- (3) 発生を拡大させないため、被害葉や被害果実をほ場に放置せず、土中深くに埋没するか、ビニール袋などに入れて密閉し、寄生した成幼虫を全て死滅させた後に処分するなど、適切に処理する。



図1 トマトキバガ幼虫による
ミニトマト葉の食害痕



図2 トマトキバガ幼虫による
トマト果実の食害痕



図3 トマトキバガ成虫



図4 トマトキバガ幼虫

表 トマトキバガに対する登録農薬（令和6年6月7日現在）

農薬名	希釈倍数	使用時期	使用回数	使用方法	登録作物		IRAC
					トマト	ミニトマト	
ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	○	5
ラディアントSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	○	5
ダブルシューターSE	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	○	5,-
アフーム乳剤	2,000倍	収穫前日まで	5回以内	散布	○	○	6
アグリメック	500～1,000倍	収穫前日まで	3回以内	散布	○	×	6
エスマルクDF	1,000倍	発生初期但し 収穫前日まで	—	散布	○	○	11A
コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで	3回以内	散布	○	○	13
トルネードエースDF	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	×	22A
アクセルフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	3回以内	散布	○	○	22B
フェニックス顆粒水和剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	○	28
ヨーバルフロアブル	2,500倍	収穫前日まで	3回以内	散布	○	○	28
ベネビアOD	2,000倍	収穫前日まで	定植後3回以内	散布	○	○	28
ベリマークSC	400株当たり25mL (希釈水量10～20L/400株)	育苗期後半 ～定植当日	合計1回以内	灌注	○	○	28
プリロッソ粒剤 プリロッソ粒剤オメガ	2g/株	育苗期後半 ～定植時		株元散布	○	○	28
グレーシア乳剤	2,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	○	30
プレオフロアブル	1,000倍	収穫前日まで	2回以内	散布	○	○	UN

防除薬剤については使用前に登録内容を農林水産省農薬登録情報提供システム
(<https://pesticide.maff.go.jp/>) で確認してください。